

霞

— 2008年度春季展示室だより — 土浦市立博物館

平成20年4月1日発行 (通巻第3号)

土浦市立博物館では春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに実物資料の展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の展示資料の見どころをご紹介、解説するものです。また、展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(3)・・・1
- 【2008年度春季の展示資料解説】
- 新治「須恵器」窯跡群(古代)……………2
- 『沙石集』『学匠之世間無沙汰之事』
(中世)……………3
- 色川三中肖像(近世)……………4
- 遊覧交通案内図(近代)……………5
- かすみ人形と水郷の土浦(近代)…6
- 市史編さんだより……………7
- 「霞」短信 博物館ではたらく…8
- コラム(3)世界に誇る土屋家刀剣…8

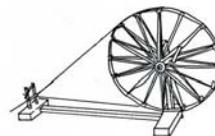
古写真・絵葉書にみる土浦(3) 絵葉書「真鍋公園より霞ガ浦を望む」



明治31(1898)年の「訂正 常陸国新治郡真鍋町地誌要略」に、真鍋公園(総宜園)について記載があります。「土地高くして桜樹林をなし、南の方市街に臨み、東の方霞ヶ浦に面し、風色絶景なり。」この地は桜の名所でした。明治22(1889)年に土浦を訪れた正岡子規は、霞ヶ浦を望むため真鍋台の絶壁にある階段をのぼり、この地にたどり着きました。広々とした平地の所々に茶店のような家があり「総宜園」の額が掲げられていたそうです。そして、念願だった霞ヶ浦を望んだ子規は、「霞ながら春雨ふるや湖の上」の句をよみました。真鍋公園は昭和7(1932)年の国道工事で掘削され消滅しました。【検索キーワード 真鍋公園】

博物館からのお知らせ

- 第29回企画展「土浦桜物語—サクラに読みとく土浦近代史—」会期 開催中～5月6日(火)まで
- 記念講演会「桜の春ができるまで—花と人の歴史」4/5(土)午後2時～3時30分 視聴覚ホール
当日受付、先着70名 講師：佐藤俊樹さん(東京大学総合文化研究科准教授) ※要入館料
- 特別展覧「後撰和歌集」(日光二荒山神社所蔵、国指定重要文化財)4/1(火)～4/20(日)
※歌聖紀貫之の「桜川」をよんだ和歌をご紹介します。
- 展示案内会 4/12・26、5/3 土曜日 午後3時～3時30分
- はたおり体験 5月中旬～7月上旬の土曜日に実施
※詳細は4月中旬以降にお問い合わせください。



★4月～6月の臨時・無料開館日について

臨時開館：4/29(火)、5/3(土)～5/6(火)

無料開館：4/6(日・土浦桜まつり)、5/18(日・国際博物館の日)

★5/7(水)は展示替え作業のため臨時休館します。ご了承下さい。

館長講座にご参加ください!

「古代天皇陵を語る」

(連続3回講座、毎月第3日曜日)

第4回 4月20日(日)

第5回 5月18日(日)

第6回 6月15日(日)

時間 午後2時～3時30分

講師 茂木雅博 館長

新治「須恵器」窯跡群

—筑波山麓にひろがる「やきもの」のふるさと—

筑波山系の南東部、市内新治地区^{とうじょうじ}東城寺や小野周辺ではいくつもの古代の窯跡^{かまあと}が発見され、新治窯跡群、新治古窯址群^{こやうし}などと呼ばれています。このあたりは天の川の水源地に近い山^{やまふところ}懐に位置しており、窯はその山麓斜面につくられた^{あながま}窖窯で、奈良時代頃から平安時代にかけての須恵器^{すえき}を焼いたものです。

須恵器は、古墳時代の中頃（5世紀）から平安時代前半（9・10世紀）に作られた、硬く焼き絞まった灰色の土器です。5世紀はじめに朝鮮半島から伝わった陶質土器^{とうしつ}の最新技術を導入し、轆轤^{ろくろ}を用いて形を整え、斜面をトンネルのように掘りぬいた窖窯の中で1200度もの高温で焼きあげます。「須恵器」の名称は、平安時代の『延喜式』などにでてくる「すえもの」「すえのうつわ」（陶器）に由来するもので、須恵器を焼いた最先端技術は現代の「やきもの」にも受け継がれています。今の大阪府などで生産が始まり、6世紀には各地に広がります。とくに大阪南部の陶邑^{すえむら}の地は国内最大級の須恵器生産地で、5世紀から10世紀の500年もの間、1000基以上の窯がつくられました。その製品は全国に運ばれ、各地の古墳や集落から発見されています。硬質の須恵器は火に弱く煮炊きには不向きで、おもに貯蔵具（甕・壺^{かめ つぼ}など）、調理具（鉢・甑^{こしき}・すり鉢など）、供膳具（杯・蓋・盤・皿・高杯^{つぎ ふた ばん さら たかつき}など）に使われました。

茨城県内では今までに、10ヶ所以上の古代の窯跡群が発見されています。最も古いものは、かすみがうら市の柏崎窯跡で、7世紀前半頃に小規模な須恵器生産をはじめています。その後7世紀末から8世紀初頭、ちょうど奈良時代のはじまりを前後する時期に、新治窯跡群と水戸市木葉下窯跡群^{あぼつけ}で大規模な須恵器生産がはじまり、どちらも9世紀後半まで続きました。古代常陸国の南北を二分する、二大窯業地帯といえます。

新治窯跡群は、小高^{おだか}、東城寺、小野^{ながいよりい}、永井寄居、今泉栗山の各地内、径3km内外の範囲におよそ11の窯跡が発見されています。中でも今泉栗山窯が最古で、7世紀末頃の操業と考えられます。これらの窯跡から出土する須恵器は、細かな雲母片の入った粗い粘土を使い、焼きのあまい製品が多いのを特徴としています。このような須恵器を出土する遺跡を追ってみると、霞ヶ浦沿岸などの茨城県南部を中心に、千葉県北部や栃木県東部にまで広範囲に流通していることがわかります。長い操業期間の最盛期には、流通範囲、生産量ともに拡大し、関東地方屈指の大規模な窯業地帯だったことが想像されます。また、さきの新治窯跡産の特徴をもつ須恵器が、周辺の7世紀前半から中頃の古墳や集落遺跡から出土しており、新治須恵器窯の操業時期はさらに遡る可能性は高く、今泉栗山窯跡以前の須恵器窯跡の発見が期待されます。

（塩谷 修）



発掘された今泉栗山窯

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を6/7（土）午後2時から開催いたします。



『沙石集』 「学匠之世間無沙汰ノ事」

— 世間知らずの東城寺僧と無住道暁 —

『沙石集』は鎌倉時代中期の仏教説話集で、東城寺の僧でもあった、無住道暁が書いたものです。無住は名を道暁、号を一円といい、上洛して諸宗を学び、禪を円爾に受け、尾張（愛知県西部）に長母寺を開いて『沙石集』『雑談集』の著者として有名な人物です。

無住の出自は明らかではありませんが、『雑談集』の「愚老述懐」によると嘉禄2（1226）年に生まれ、八田（小田）氏に庇護されていたと思われる女性に養育されていたようです。その後、常陸国宝蘭寺（石岡市）で出家した無住は、東城寺の円幸房に学んでその後を継ぎ、建長4（1252）年に東城寺を律院化しています。また、29歳の時に般若寺の実道房源海に止観を学んだとされています。

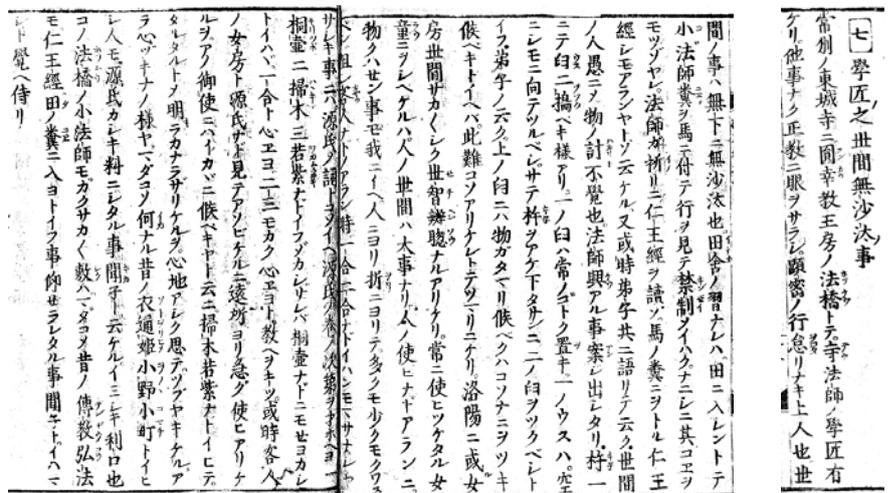
『沙石集』五巻七「学匠之世間無沙汰ノ事」の記述では、世間のことを知らない東城寺法師（円幸房）について、次のようなことが書かれています。

「東城寺の円幸房は、経典を読み、顕教（釈迦の教え）と密教の行に専念する学徳を備えた僧であるが、全くの世間知らずである。田舎の習慣で、田んぼに肥料として入れるために、小法師が馬の糞を集めているのを見て、何で糞をもつのかと、やめるようにいって、仁王経を唱えだした。これに対して小法師は、馬の糞にも劣る仁王経し（教師）もいたものかといった。」仁王経の経に教師の教を掛けているのが面白く、ひょっとして、この小法師は無住だったのではないかと想像させられます。また、この記事から13世紀には、既に厩肥（家畜の糞尿と糞を混ぜ合わせた肥料）の技術が広まっていたことが分かります。

『沙石集』は、俗事と教理を対比させながら教えを説いています。庶民的発想から大衆を仏教に帰依させる手段として分かりやすく書かれており、巧みな文章に引き付けられます。鎌倉時代中期の代表的な仏教説話である『沙石集』や『雑談集』には、無住が育った常陸での逸話が他にも見られ、常陸の地が無住の思想に与えた影響は少なくないと思われます。

無住にとっての転機は、律宗との出会いであったといえるでしょう。建長4年に無住が東城寺を律院化したのは、西大寺系律宗の忍性が常陸国に入った年でもあり、忍性と無住との接触が容易に想像できるからです。忍性といった一流の高僧に出会い、このま

ままでは自らが「世間無沙汰の学匠」になってしまうのではないかと感じた無住は、翌建長5年、律学を学ぶために東城寺を出て南都（奈良県）に上ります。『沙石集』「学匠之世間無沙汰ノ事」の記事は、無住が東城寺を出立する動機を暗示させているように思えるのです。そのように考えると、この記事の馬の糞を集めていた小法師は、やはり無住ではないかと思えてくるのです。（中澤達也）



『沙石集』（展示資料は江戸時代の版本） 個人蔵

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を6/28（土）午後2時から開催いたします。



色川三中肖像

— 町人学者の横顔 —

写真技術がなかった江戸時代において、肖像はその人のありし日の容貌を伝えてくれる唯一のものです。この肖像をじっくり眺めてみましょう。

目尻のシワはこの人物が初老であることを伝えています。えらが張り出した四角い顔で色白のようです。眼光は鋭く、唇が固くむすばれきりとした表情をしています。紋入りの袴に脇差を差して座り、脇には筆硯と書物が積み上げられた机が置かれています。

この人物の名は色川三中といます。通称を三郎兵衛といい、初代晴敏から数えて九代目、色川家は江戸初期、町の発展を見込んで土浦へ移り住んできた家のひとつだったようです。

三中は通称を恵助（圭輔、桂助とも）、諱を英明といい、三中・東海・瑞霞園と号しました。商家として薬種の製造販売と醤油醸造業を手がけていました。

三中は熱心に家業にはげみながら国学研究にも勤しみ、『香取文書纂』の編纂、『新編常陸国誌』の補訂などの業績を残しています。特に香取神宮の社家文書を写したことは、その後原本が失われてしまったものもあり、歴史資料を伝えるという意味で重要な仕事となりました。著書『田令図解抄』は、古代の度量衡を実証的に研究したとして高く評価されています。

三中のもうひとつの業績とでもいえるのが日記の執筆です。「家事志」と題した日記を文政9（1826）年5月、26歳の時から書き始め、弟と協力してその後31年書き綴りました。この日記はご子孫の方が守ってこられ、現在博物館が寄託を受けています。

日記はほぼ毎日、天気始まり、出来事、来客、商品の値段や穀物の相場、伝聞や触書の写し、時には喜びや怒りなどの感想までも書き込む充実ぶりです。一日数行という日もありますが、日よっては三千字近い日もありました。日記や著書の他にも随想や短文など、三中のちょっとした書き物が数多く残っています。現代に生活していたら「メモ魔」と呼ばれていたかもしれません。

肖像には「群山」という落款が捺されています。日記によると嘉永3（1850）年10月に色川家に群山という名の絵師が泊まっています。三中は数えて50歳、「人生五十年」ともいう節目の年に、学問と家業とを両立する姿を描かせ、後世に残そうとしたようです。

博物館では『色川三中日記 家事志』第一巻から第三巻までを刊行しております。これを機会に是非ご覧ください。（木塚久仁子）



色川三中肖像画

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を5/24（土）午後2時から開催いたします。



遊覧交通案内

— 土浦を中心に描かれたガイドマップ —

「遊覧交通案内」は、昭和7（1932）年に発行された『土浦商工会誌』に、折り込みの図版として挿入された案内図（ガイドマップ）です。画面の左上には筑波山、右下には霞ヶ浦が大きく描かれています。

南北に走る常磐線の中央に配された土浦駅からは、筑波山を取り巻くような形で筑波鉄道（岩瀬からは水戸線）が、霞ヶ浦南岸には常南電車の線路がそれぞれ延びています。霞ヶ浦には水郷汽船の航路（点線）があって浮島・潮来・鹿島方面をつなぎ、実線で示されている乗合自動車は現在のバス路線にあたるもので、やはり土浦を中心に放射状に広がりを見せています。土浦が交通の中心であったことがよく分ります。



「遊覧交通案内」

この案内図には土浦周辺の見所も紹介されています。

たとえば、阿見の霞ヶ浦海軍航空隊。水上班・陸上班の施設とともに格納庫がイラストで示されています。この格納庫は第一次世界大戦後に敗戦国のドイツから押収されたもので、東洋一の偉容を誇るものでした。昭和4（1929）年にドイツの飛行船ツェッペリン号が霞ヶ浦に飛来した理由として、飛行船を停泊させることが可能なこの巨大格納庫の存在がありました。ツェッペリン号やリンドバーク機をはじめ、霞ヶ浦の飛行場には国内外から多くの航空機が飛来しました。

筑波山の方に目を転じると、土浦からは筑波鉄道に乗り、北条駅もしくは筑波駅で降りて、山へ登る案内が示されています。東京などからの登山客にたいして、土浦駅はその玄関口としての役割を担いました。「江戸屋」「山水荘」といった旅館も示され、山腹にはケーブルカーのイラストもみられます。

中央に蛇行して描かれているのが桜川。兩岸のピンク色に染められた桜がひとときわ目を引きまします。明治時代末期から昭和時代初期にかけて堤防に植えられた桜が成長して、新名所として積極的に取り上げられるようになるのも、この「遊覧案内」が作成された頃のことです。海軍航空隊の見学、筑波山への登山、霞ヶ浦の遊覧船など、周辺の観光資源を取り結ぶ結節点であった土浦。桜川の名前にふさわしい景観が誕生したことは、土浦町のなかに独自の観光資源が創造されたことを意味していました。

「遊覧交通案内」は、遊覧都市として花開いた当時の土浦を語りかけてくれる格好の「ガイドマップ」といえます。（宮本礼子）

ご紹介した資料を中心とする展示解説会を5/3（土）午後2時から開催いたします。企画展での資料紹介は5/6（火）までです。それ以降はメッセージ展示パネルでごらんください。

かすみ人形と水郷の土浦

— 水郷情緒を伝える郷土工芸品 —

タニシの殻を利用してつくられる小さな工芸品「かすみ人形」。この人形の製作は、昭和9（1934）年に始まりました。考案者は神林 隻山^{かんばやしろうざん}という地元の日本画家で、「土浦郷土工芸研究会」が製作にあたりました。当時の土浦は、水郷めぐりや筑波山への登山、霞ヶ浦海軍航空隊^{かすみ がうらかいぐんこうくうたい}への見学に訪れる人々が多く、「かすみ人形」は土産品として人気を博しました。

土浦の「桜川堤の桜」が全盛期を迎え、多くの遊覧客を楽しませたのもこの頃のことです。昭和10年の「亀城^{きよがき} 会会報」によると、観桜のにぎわいにあって郷土工芸研究会では「かすみ人形」の宣伝につとめ、独立の店舗を設けてポスターを数多く貼り出しました。そして、佐原方面から来た団体客に対して一括500個を売り渡したと記しています。この佐原から来た団体とは、水郷汽船^{すいごう きせん}に乗船をして霞ヶ浦をわたり、土浦で上陸した観光客と思われます。「桜川堤の桜」のお花見客には、鹿島神宮の参拝後や、潮来^{いたこ}や佐原の景勝地を見学した後、遊覧船を楽しみながら土浦へとやって来る人々も多かったようです。

この時期の土浦では、観光パンフレット「水郷の土浦」を製作したり、川口川や土浦港を被写体とする「土浦名所」絵葉書を発行したりして、水郷「土浦」を積極的にアピールしていました。「桜川堤の桜」のお花見では、舟にのって桜川を上り、水上から桜を楽しむ光景がみられました。これも水郷にふさわしいお花見の方法だと考えられたようです。昭和8年3月、桜川に^{においばし} 勾橋が架橋されます。当時の新聞記事には「風雅な木橋だけに水郷土浦の風情を一層濃くし、その名も桜川に勾橋、いかにも春らしい感じだ」と伝えています。

あまり知られていないことですが、「かすみ人形」には当初、瓢箪^{ひょうたん}を利用した「ひさご人形」とよばれる種類もありました。しかし、土浦周辺で豊富にとれるタニシの殻を利用した「たにし人形」の方が、材料の入手や加工が容易で、しかもタニシの曲線を利用した特有のかたちが人気を博したようです。水郷情緒を伝えるという点でも、タニシの人形の方がふさわしかったものと考えられます。現在では「かすみ人形」というと、もっぱら「たにし人形」のことを指すようになりました。

昭和10年前後の土浦では、周辺の観光資源を活用しながら、遊覧都市としての性格を打ち出していました。霞ヶ浦、桜川そして川口川という観光資源を積極的に利用しながら、水郷「土浦」をアピールした時代だったのです。「かすみ人形」はそうした郷土にふさわしい工芸品となったのです。 （萩谷良太）



かすみ人形（一番右は「ひさご人形」、その他は「たにし人形」）

ご紹介した資料を中心とする展示解説会を4/26（土）午後2時から開催いたします。企画展での資料紹介は5/6（火）までです。それ以降はメッセージ展示のイラストをごらんください。

市史編さんだより

～～～ 「家事志」にみる江戸期のシニアライフ ～～～

色川家使用人、勝右衛門の生き方

「家事志」には様々な人々が登場しますが、その中から勝右衛門という人物をご紹介します。

三中が26歳で「家事志」を書き始めた頃の色川家は、10年前の大火で家産は傾き加減の上、前年に父を亡くし、最初の結婚も破綻という大変な時期でした。そのような苦境の中で、若い三中は何人もの年上の人々に助けられながら家業を立て直す努力をしました。その一人が勝右衛門です。

勝右衛門は三中の家に住み込みで働いていた使用人です。主に農事を受け持ち、田畑の経営や小作人の交渉などを担当していました。現代と違い「家事志」が記された当時の田畑の経営はとても複雑でした。田畑には持ち主に関係なく一定の割合で年貢という税がかかっており、地主と耕作者で取り決めてまず年貢を納め、その上で耕作者は小作料を地主に払わなければなりません。作柄は年によって変わるので、一定の取り決めをしてもまた交渉をやり直すことも多かったのです。色川家は商人ではありませんでしたが地主でもあり、自家で田畑も耕作していました。薬種業であったため、米や野菜の他に薬草や綿なども作っていたようです。

勝右衛門が色川家で働くようになったのは、三中が生まれる以前のことで、彼が50歳ぐらいの時からだとして記されています。出身は谷田部で、山本という姓もありました。当時百姓で姓を持つということはかなりの家格でした。色川家では三中の父が谷田部の出身だったこともあり、奉公人の多くを谷田部から雇い入れていました。勝右衛門もその谷田部ルートで色川家に来ることになったと思われます。

文政11(1828)年12月には、勝右衛門が今度の正月で80歳になるのでお祝いに餅をつく、という記事があります。そしてあくる12年3月29日には、見世(店)の番頭である与市に勝右衛門からの農事の聞き取りを記録させ年中の心得とする、とあります。この文政12年12月4日に、80歳の勝右衛門は約30年の勤めを終えて谷田部の生家に帰ることになりました。いよいよ昔を知る人が少なくなるのが何より悲しくおもわれる、と三中は愛惜の情を記しています。

谷田部へ帰った勝右衛門とはその後も折にふれて交流が続いていました。文政13年の9月には、三中から勝右衛門の養子小藤太に、金二分二朱と六百五文で誂えた麻上下を贈っています。小藤太が何かの役にでも付いたお祝いでしょうか、かなりの贈り物です。その後勝右衛門に届くはずのお金が届かないという事件がありました。これについては「家事志」の原本を保存して来られた色川徳治家に残された色川家の来翰集に、山本勝右衛門から色川三郎兵衛(色川三中)宛の手紙が三通あります。80歳を過ぎてもしっかりした見事な筆跡で、文章も品格のある明快なものです。この手紙のお陰で勝右衛門が山本という姓であることもわかったのです。

人生50年と言われた時代、勝右衛門は自家のための自分の務めを果たしたのち、家督は子供に譲って思い切りよく他家へ奉公しています。そこで農事の経験を活かして若い主人の助けとなり、80歳までも元気で働きました。さらにその知識が後々の参考のために記録されるほどに重用される、素晴らしい生き方ではないでしょうか。人にはそれぞれの事情があつての事でしょうが、一生をきちんと生きるといふ点で見習いたいシニアライフといえましょう。

「家事志」には勝右衛門の他にも、番頭の与市、間原平右衛門、白鳥武八など、経験を活かして第二の人生を歩むシニア達がたくさん登場します。活躍するシニア達にも注目して「家事志」を読んでいただけると嬉しく思います。

村松常子(市史編さん係臨時職員)

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。今号は3月まで学芸員の仕事のサポートをしていた臨時職員さんからみた博物館をご紹介します。

博物館ではたらく

市立博物館ではどのくらいの方が働いているか知っていますか。入口をくぐれば受付の方が来館者を出迎えていますし、警備や掃除の仕事をしている方を見かけることもありますよね。展示の説明をする学芸員と呼ばれる博物館の専門職員がいることも、電話や事務室で対応する職員がいることもおそらくご存じのことと思います。

ですが、それは氷山の一角。展示室が博物館のごく一部分であり学芸員の仕事が展示の解説だけではないように、博物館には裏で支える人たちが本当にたくさんいるのです。例えば、市立博物館の3階には研究室があり「家事志」などの郷土資料の研究を進めています。はたおり教室や文化財愛護の会のように博物館の利用者でありつつも展示や指導を行う人たちもいます。そんななか、私は学芸員の仕事を補助する一人として博物館に3年間勤めてきました。

ただほとんどが博物館の裏側での作業なので、私の仕事は裏のさらに奥（裏の裏では表になってしまいます）の仕事といえます。新しく寄託された資料を掃除して、測り、写真を撮り、特徴を記録し、資料ごとに番号を付けて台帳を作ったり、IPM（総合的有害生物管理）のために収蔵庫を隅から隅まで掃除したり、展示室の切れた電球を替えたり、展示用のキャプション（展示の説明文）や案内文などを作っていました。また、ときおり掲示板のほり替えや展示替え作業も行うので、白衣を着て脚立をかついでうろうろしていた姿を目撃した方もいらっしゃるかもしれません。

縁あって4月からは千葉県南端に位置する館山市で学芸員として働くことになりました。これまでよりは少し表に出る機会が増えることになるかもしれません。3年間こちらで学んだことを生かしつつ、新しい土地でも表から裏から博物館と地域の歴史や文化を支え続けたいと思っています。 山村恭子（元学芸係臨時職員）

コラム（3） —世界に誇る土屋家刀剣—

土浦市では、国宝の短刀を含む土屋家の刀剣83口（内、重要美術品1口は寄贈）を平成14年に一括して購入しています。これらの刀剣は、江戸時代の約200年間、11代にわたって土浦地方を治めていた大名土屋家が所持していたものです。武具に限らず茶道具や書画などの大名道具の多くは散逸してしまい、行方すら知られていないものがほとんどです。このような中で土屋家の刀剣類が永い間まとまって残されていたのは、奇跡的なことでした。また、土屋家刀剣には、多くの拵（こしらえ 刀身を納める外装）が付いています。大名が所持していた拵は、全国的にも数が少なく大変貴重なものです。土浦市が現在所有する土屋家刀剣には、国宝1・重要文化財4・重要美術品6口が、当館以外にも重要文化財2・重要美術品3口があることがわかっています。

近年、海外では日本刀ブームが起きています。歴史的にも美術的にも優れた土屋家刀剣は、いずれ世界に誇れる歴史資料になると考えられます。そのためにも、充分なる研究と保存活用を図っていかなければならないのです。 (中澤達也)

情報ライブラリー更新状況

【2008・4・1現在の登録数】

古写真 361点(+40)

絵葉書 208点(+11)

※（ ）内は2008年1月5日時点との比較です。

※展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新いたしております。1ページでご紹介した絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2008年度
春季展示室だより（通巻第3号）
編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928

次回展示（2008年度夏季）は2008年7月1日（火）からご覧いただけます。「霞」2008年度夏季展示室だより（通巻第4号）は7月1日発行予定です。次回のご来館をおまちいたしております。